『漫才のわーる』

大石泰司

2023／12／05

初稿

ペラ76枚

登場人物

小林友理（２４）・・・漫才師、隼人の相方

高橋隼人（２５）・・・漫才師、小林の相方

野村たえ（２３）・・・小林の彼女

間宮宏介（４２）・・・番組プロデューサー

斉田充（２８）・・・漫才師。「おデブマシーン」のボケ。

本郷丈義（３３）・・・漫才師。「おデブマシーン」のツッコミ。

あらすじ

正統派漫才師として売れようと上京した二人組の漫才師の高橋隼人と小林友理。彼らは、正統派漫才師としての実力と安定感はあったものの、なぜかSNSなどのメディアに出て売り出している他のコンビたちの方が売れていく現状に悩んでいた。

自分たちももっとSNSでの露出を増やしていこうと考える小林と、自分の信じる正統派漫才で売れようと頑なな隼人は、やがて対立していく。

そんな中、ネタ番組のオーディションで出演権を勝ち取る２人だったが、番組内のフリにうまく答えられず撃沈。その後、ライバル芸人たちにバカにされている事実を知った隼人が激昂、暴力沙汰を起こし、２人は解散する。

○ ホール・楽屋

喧噪の中、煙草の煙の中で蛍光灯の光がちらつく。

コームで丁寧に髪を整える手。

楽屋の小さなテレビモニターには、漫才をしている芸人が写る。

それを見ているオールバックの高橋隼人（２５）。

鏡に向きなおし、自分の顔をにらんでいる。

○ 駅・ホーム

到着する電車。

降りてくる人ごみたち。

遅れて遠慮がちに下りてくる小林友理（２４）、そのまま急ぐようにエスカレーターを駆け上がっていく。

○ ホール・控室

ジャケットを羽織る隼人。

机に置かれた携帯を見つめる隼人。
と、後ろから隼人にぶつかる芸人Ａ。
芸人Ａ「あ、ごめん」
隼人、何も言わずにらむ。
と、モニターに映っていた芸人２人が楽屋に戻ってくる。
おおと声援が上がる楽屋内。

○　街中
走っている小林。
前を歩いている子供（６）が転んでしまい、泣き出す。
小林、立ち止まり一瞬ためらうが子供に寄り添い、あやす。
時間を気にする様子の小林。

○　ホール・廊下
歩いて舞台袖に向かう隼人。
隼人「……チッ」

○　公園

手を振っている小林。

遠くで小林に手を振っている親子。

手を振り続けている小林、ふと我に返って焦ったように走り出す。

○　ホール・舞台袖

壁に向かって一人でリハをする隼人。

ホールからは客の笑い声がチラホラ。

○　同・表

走って会場に入っていく小林。

○　同・舞台袖

前の芸人が退場していき、隼人とすれ違う。

出囃子が鳴り始める。

アナウンス「次の芸人は『酒とサカナ』！」

隼人の後ろから走ってくる小林。

横に並ぶ二人。

隼人「うしっ」
小林「はあ…はあ…」
隼人「いくで」
一切目を合わせないふたり。
隼人、舞台へ向かう。

○　同・小ホール
壇上に出てくる隼人と小林。
隼人「どーもー、酒とサカナです～」
小林「（息切れしながら）よろしくお願いします～」
隼人「てかなんでお前息切れしてんの」
小林「いやな、なんか魚くわえた猫追いかけてたら財布忘れてん」
隼人「なんでお前サザエさんのオープニング再現しとんねん」
小林「いやまあ、俺ほどの波平になるとな」
隼人「お前波平やったんかい」
爆笑に包まれる会場。

○　同・楽屋

漫才をする『酒とサカナ』の二人が、
モニターに映る。
それを見る芸人たち。
会場から爆笑の声が聞こえてくる。
が、楽屋は静まり返っている。

○　同・小ホール

笑い声がどっと響く。
隼人「なんでサザエさん魔王にじゃんけん挑んでんねん！　もうめちゃくちゃや！」
小林「来週もまた見てくださいね」
隼人「やかましい！　もうええわ。どうも、ありがとうございましたー」
退場していく酒とサカナ。
拍手が鳴っている。

○　同・廊下

歩いている隼人。その後ろを歩く小林。
次の芸人の出囃子が鳴っている。

○　同・楽屋

座ってスマホを見ている小林。

隼人の声「おい」

小林「（スマホを見たまま）ん」

と、小林の頬に平手打ちが炸裂する。

どよめく周囲。

小林「なにすんねん」

隼人「寝坊か？」

小林「そんなんとちゃうわ」

隼人「遅刻やぞ、こんな大事な日に」

小林「間に合ったからいいやん」

隼人「間に合ってへんわ、なんやその恰好」

小林「ウケたしもうええやん、やめよ」

隼人「なんやお前その態度！」

と、小林に殴りかかろうとするが、ほかの芸人たちに止められる。

隼人「M―1やぞ！」

小林「たかが1回戦やん！」

白熱し始める喧嘩。

小林も席を立ち、喧嘩腰になっていく。
そこに近づいてくる斉田充（２８）と、
本郷丈義（３３）。
斉田「ちょっと……」
誰も反応しない。
斉田「ちょっと！」
大声に反応した周囲。静まり返る。
斉田「今ユーチューブとってるからさ、静かにしてくんね？」
ぽかんとする一同。
去っていく斉田と本郷。
隼人「なんやあいつ」
小林「お前、しらんの？」
隼人「知るか」

○　同・舞台袖
アナウンス「次の芸人は『おデブマシーン』」
壇上に出ていく斉田と本郷。
それを舞台袖から見る隼人と小林。

小林「今若手で一番勢いがあるって言われとるコンビで、ユーチューブの再生回数とかもすごいらしいで」

隼人「なんぼなん」

小林「知らんけど１００万とか？」

隼人「……しょーもな」

隼人、幕の横から客席を覗く。

重い空気。くすくすとややウケの客たち。

斉田の一発ギャグ。大爆笑の会場。

隼人「おもんな」

○　同・小ホール

次々と芸人の名前が発表されていく。

客席に座っている芸人たち。

アナウンス「『№1118、酒とサカナ』」

安堵の表情の小林。

隼人は黙って『おデブマシーン』の二人を見ている。

アナウンス「『№2292、おデブマシーン』」

わっという歓声とともに、抱き合って
喜んでいる斉田と本郷。

○　公園（夜）

二つの缶ビールがぶつかる。
ベンチに座って晩酌する隼人と小林。
ぐびぐびとビールを呑む小林。

小林「プハア〜」

隼人、片手に持ったビールの缶を逆さ
にして中身を捨て始める。

小林「ちょっお前なにしてん！」

と、隼人の前にしゃがみ、捨てられて
いるビールを飲んでいる。
隼人、ふっと笑うがすぐに表情は曇り、
目線をそらす。
飲み切った小林。

小林「もったいないやろ！」

隼人「一回戦突破くらいで喜べるかあほ！」

小林「ええやんか別に！」

隼人、小林のビールを奪うと、公園のゴミ箱に投げ捨てる。

小林「あああああ！」

隼人「今年、レベル低いわ」

小林「そうかな？」

隼人「そうやろ、あんなんでも一回戦通んねんで」

小林「お前今日そればっかやな……」

隼人「……」

小林「俺たちも始めるか？　ユーチューブ」

隼人、立ち上がって

隼人「絶対に嫌や」

と、振り返らず去っていく。

○ホール・会議室（夜）

お疲れさまと声をかけながら出ていく審査員たち。

その中でまだ座って資料を眺めている間宮宏介（４２）。

○　小林の家（夜）

玄関が開く。

小林「ただいまー」

１０畳ほどの１ＬＤＫ。新しめの家具に、きれいに羅列された本棚。

こたつに入って携帯でメイク動画を見る野村たえ（２３）。

たえ「ん～」

小林、入ってきて荷物を置く。

たえ「友理」

小林「ん？」

たえ、小林の方じっと見ている。

小林、視線に気づき

小林「（笑って）なんだよ」

たえ「アイスとって」

小林「俺のは？」

たえ「（笑って）買ってある」

小林「合格」

と、冷蔵庫からアイスをとってくる。

食べ始める二人。

たえ「ん～しあわせ」
小林「いくらだった？」
たえ「何？　いいよ。いつもそんなことしないじゃん」
小林「いいからいいから」
たえ「なになに、どういうこと？　なんかあった？」
小林、少し黙って
小林「一回戦、突破した」
たえ「まじ、すご。天才じゃん」
小林「やろ」
たえ「じゃ、このアイスはお祝いだから私のおごりね」
小林「いやいや、前もそうやって」
たえ「（遮るように）で、２回戦いつなの」
小林「……来月」

○　ホール・廊下
多くの芸人たちが固唾をのんでスマホを見ている。

二人座って結果発表配信を見る小林と
隼人。
声「１１６６番　おデブマシーン」
遠いところから歓声。
声「以上、２６組が３回戦進出となりました」
全く動かずに真顔でスマホを見ている
二人。

○　同・横の道（夜）
歩いている隼人と小林。葬式のような
雰囲気。
隼人「……なんやねんこれ」
小林「仕方ないよ」
隼人「仕方ないわけあるか！　審査員は何を
見てんねん」
小林「……」
隼人「俺が一番ウケとったやろ……」
小林「……」
と、後ろから間宮が近づいてくる。
間宮「あの、酒とサカナのお二人ですか？」

振り向く二人。

小林「はあ、一応そうですけど」

隼人「一応ってなんやねん」

間宮「とても面白かったです。今回は残念でしたが……」

隼人「ええ……クソ審査員のおかげでね」

間宮「……申し遅れました。私、そのクソ審査員をさせていただきました間宮と申します」

と、名刺を差し出す。

『〇〇テレビ　プロデューサー』

ぽかんとしている二人。

〇　喫茶店・店内

差し出される書類をまじまじと見続けている隼人と小林。

その対面に間宮。

間宮「今度からやるネタ番組があって、新しい才能発掘ということで新人枠のオーディションをするんですよ」

小林「はあ……」
間宮「合格する保証はないですけど、僕の方からも推しときますんで」
隼人「やらせてください」
小林、その姿を見て
小林「俺も！　お願いします」
と頭を下げる。

○　テレビ局・オーディション会場
無駄に広い室内に間宮と面接官たちが並んでいる。
隼人「もうええわ。どうもありがとうございました」
頭を深く下げる二人。
静まり返っている。
面接官Ａ「ネタはどっちが書いてんの？」
隼人、手を挙げる。
少しうつむきがちな小林。
何やら書き込んでいる面接官たち。
同じく間宮も。

と、スタッフの一人が面接官に次のコンビの資料を渡しに来る。

スタッフ「こちらです」

と、二人を出口へ誘導する。

小林「え？」

という間に出される二人。

○　同・廊下

出てくる隼人と小林。

小林、やけに静かな隼人を、恐る恐る見る。

隼人、鬼の形相でドアをけろうとするが、小林が必死に体で止めている。

そのまま羽交い絞めになって退場していく。

○　同・外

羽交い絞めのまま出てくる小林と隼人。

隼人、小林を振り切って

隼人「なにすんねん！」

小林「こっちのセリフや！」
隼人「（睨んでいる）……」
小林「仕方ないやろ。こういうもんやて」
と、帰ろうと踵を返す。
隼人「……悔しくないんか？」
小林「……」
去っていく小林。
取り残される隼人。

○　隼人の部屋（夜）
6畳一間のボロアパートの一室。
ローテーブルにあるノートに向かってペンを走らせている隼人。
あたりはボツになったネタの紙であふれかえっている。
隼人、ノートを破り投げ捨てる。

○　電車の中（夜）
立っている小林。

ふと座っている人が見ているスマホの画面が目に入る。
そこには『おデブマシーン』のユーチューブ配信が。

○　隼人の部屋（小林の妄想）
スマホに映る画面に隼人と小林。
隼人「どーも！　酒とサカナです！」
小林「よいしょー！」
隼人「今日はこの新発売のラーメン！　食べてみたいと思います～！」
小林「ふうっふ～！」
隼人、ラーメンをすするが、むせてせきが止まらなくなる演技。
隼人「がほっごほっ……」
小林「隼人！　大丈夫か！　死ぬな―！」

○　元の電車の中
小林、我に返り、恐ろしいものを見たかのような表情。

○　テレビ局・会議室

放送作家数人とディレクター、そして
間宮が会議をしている。

D「はい、じゃつぎはえーと『酒とサカナ』」

作家A「面白かったよね」

うんうんとうなずく周囲。

間宮「それじゃ……」

作家B「（遮って）でもさ、普通なんだよね」

作家A「確かに。目新しさがないっていうか」

D「あんまり人気もないみたいですし」

間宮「でも逆にこういう王道系って割と珍し
くないですか？」

作家B「そうかな～？」

と半笑い。

愛想笑いをしている間宮。

○　ガソリンスタンド

バイト中の小林。窓を拭いている。

と、ポケットのスマホが鳴り、周りを確認してから出る。

小林「もしもし」

間宮の声「もしもし、間宮です」

小林「あ、間宮さん、お疲れ様です」

間宮の声「あの、ちょっと言いにくいんだけど」

小林「……ダメだったすか？」

間宮の声「うん。ごめん」

小林「そっすか……」

間宮の声「高橋君には君から伝えておいてもらってもいいかな？」

小林「……はい。わかりました」

と、電話を切る。

小林、落ち込むように下を向いている。

小林「……」

顔を上げる小林。すると、窓の外に隼人が立っている。

小林「うわあ！」

○　公園（夕）

ネタが書かれたノートを読んでいる小林。

その横に座る隼人。

隼人「どうや。おもろいやろ」

小林「うん……」

読んでいる小林。しかし、クスリともしない。

隼人、その様子を見て

隼人「ユーチューブならやらんで」

小林「別にええよもう」

隼人「……俺はな、漫才がしたいねん。タレントになりたいわけちゃう。やからな、お前と仲良くじゃれあう気はないで。ビジネスパートナーや。……俺は昔のダウンタウンが好きやった。今は腑抜けや。仲ようしたらあかんねん」

小林「別に俺たちもともと仲良くはないやろ」

隼人「それもそうやな」

沈黙する二人。

小林「……あのさ」

隼人「（かぶせて）お前はどうなん。漫才がしたいんか？」

小林「……わからん」

隼人「そうか」

小林「うん」

○　電車の中（夜）

立ちながら電車に揺られる小林。

小林、窓の外を見る。

高速で横移動していく光の塊たち。

ふと、窓に映った自分に焦点が合う。

隼人の声「俺はな、漫才がしたいねん」

面接官の声「ネタはどっちが書いてんの？」

見つめている小林。

○　小林の家・表（夜）

○　小林の家（夜）

こたつに入ってメイク動画を見ている
たえ。
小林「何見てんのそれ」
と、こたつに入ってくる。
たえ「メイクの動画」
小林「参考にしてる的な？」
たえ「うーん、それもあるけど～」
動画の中で新作コスメを紹介している。
たえ「見て！　これ、めっちゃ可愛くない？
てかこの子似合いすぎ！」
小林「おお～。人気なの？　この子」
たえ「うん。めっちゃ人気」
小林、まじまじと画面を見つめる。
小林「たえちゃん」
たえ「なに？」
小林「俺さ、芸人やめようかな」
たえ「なんで？」
小林「隼人にさ、今日言われて。お前は漫才
がしたいんか？って」
たえ「うん」

小林「答えられんかった」
俯いている小林。
たえ「（スマホをしまう）……」
小林「気づいたんだよね。俺隼人みたいに漫才がしたいわけじゃなくて、ただ有名人になりたいだけだった」
たえ「……」
小林「そんな気持ちでやったら隼人に申し訳ないし。それに、たえちゃんにも迷惑かけっぱさしでさ……」
たえ「……そっか」
小林「……うん」
たえ、立ち上がって、クローゼットを開けて何かを探し始める。
小林「たえちゃん？」
たえ、一冊のノートを取り出し、開いてこたつの上に置く。
そこには汚い字で書かれた無数のネタのアイデアたち。
小林「え……なんで」

たえ、小林をにらみながら

たえ「やめたきゃ勝手にやめればいいけどさ、隼人くんのためにとか、私のためにとか。あきらめる理由に他人を使わないでよ！　あまりにも自分勝手すぎるでしょ……。私は友理にそんなに気を使ってもらわなきゃいけないくらい弱い？　そんなに頼りない？　馬鹿にしないでよ！」

小林「……」

たえ「友理が自分も書けるようになりたいって思って必死にネタ書いてたの知ってるよ？　この思いは偽物？　別に有名人になりたくたっていいじゃん。自己満足だっていいじゃん。何がダメなの？　私は支えるって決めたし、頑張ってる友理だから応援してたんだよ」

小林「……」

たえ「それでもやめたいなら別に止めないけどさ、ちょっと勝手すぎるよ……」

たえ、寝室に逃げ込むように去っていく。

小林、俯いている。

○　レインボーブリッジ（早朝）

早朝のレインボーブリッジ。日はまだ完全に顔を出さず、かすかな光が水面を照らしている。

長く伸びた橋。閑散としているなか、足音と息切れが近づいてくる。

奥から走ってくる小林。

小林「あああああああ」

○　テレビ局・前（朝）

時間を気にして歩いている間宮。

と、入り口付近に座って俯いている人影を発見する。

驚く間宮。

間宮「小林君……？」

小林、顔を上げる。

○　同・廊下

歩いている間宮。それについていく小林。

小林「お願いします！　お願いします」

間宮「駄目なんだよ。もう決まったことだ」

小林「そこを何とか！　何でもします！」

間宮「駄目だ」

小林「ここで出れなきゃダメなんです！　最後のチャンスなんです！　出れなきゃ芸人やめます！」

と、立ちどまる間宮。

勢い余って間宮にぶつかって転ぶ小林。

間宮「（ため息交じりに）……わかったよ。交渉してみるよ」

小林、みるみる笑顔になっていく。

○　同・スタジオ（日替わり）

放送作家Ａに頼み込んでいる間宮。

○　同・廊下

ディレクターに『酒とサカナ』の漫才を見せている間宮。

○　方々に頭を下げまくる間宮

○　小林の家

ノートを広げ、ネタを書いている小林。

スマホが鳴り、出る。

笑顔になっていく小林。

○　公園

大きく喜んでいる小林。

ふっと笑う隼人。

○　小林の家（夜）

たえに話す小林。

よかったねと泣きながら抱き着くたえ。

○　隼人の家

ダウンタウンの漫才の動画をテレビで見ている隼人。
貧乏ゆすりをしている。

○　テレビ局・表
スタッフの声「５秒前！　４、３」

○　同・スタジオ・セット裏
番組の収録が始まる。
陽気な音楽とともにＭＣがしゃべりだしていく。
真っ黒な衣装に身を包み、緊張している様子の隼人と小林。
セット裏には、何人もの芸人が待機している。
その中には『おデブマシーン』の斉田と本郷の姿も。
と、トップバッターの芸人が誘導され、セットに上がっていく。

ネタの声だけが響いて聞こえる。かすかに客の笑い声も。

×　×　×

ついにスタッフに誘導される二人。

階段を上がり、服装を整え待機する。

隼人「いくで」

小林「おう」

幕が開く。

○　同・スタジオ

隼人「どーもー、酒とサカナです～お願いします～」

小林「あのね、おれ思うねんけど、今の時代自分で動画をとって、それをネットかなんかに上げてお金稼ぐこととかできひんかな思って」

隼人「いやお前それユーチューバーやん。もうあんねん実は」

小林「え、もうあんの？　こんな斬新なアイデア、俺以外誰が思いつくんや！」

隼人「なんの自信やねんそれ！」
小林「でもそれやりたいねん」
隼人「いやいや難しいで？　ユーチューバーもいろいろあんねん。〇〇系ユーチューバーみたいな」
小林「ほうほう、例えば？」
隼人「例えば、暴露系ユーチューバーとか、料理系ユーチューバーとか」
小林「ああ～それならもう考えてあんねん」
隼人「なに？」
小林「胃カメラ系ユーチューバーや」
隼人「いや特殊やな。誰が見たいねん。誰がお前の胃の中見たい思うねん」
小林「ちゃうちゃう、各病院の胃カメラの機種暴露すんねん」
隼人「いやだから誰が見たいねんそれ。変なもん暴露すな！」
小林「ゲストも呼んでんねん」
隼人「おお～ええやん誰？」
小林「渡部陽一さん」

隼人「一番遠いやん。胃カメラ一番遠いやろ」
小林「胃という戦場を駆け回ってほしいねん」
隼人「やかましいわ。他無いの？」

○　同・カメラ横
間宮が腕を組んで二人の様子を見ている。

○　同・スタジオ
小林「（ゆっくり喋る）今日は、このカツサンドを食べてみたいと思います」
隼人「渡部陽一や！　もうええわ。どうもありがとうございました～」
拍手と音楽が鳴る。
退場していく二人。
ＭＣ「ありがとうございました～。『酒とサカナ』のお二人でした。では少しお話を聞きましょう」
再び出てくる。

ＭＣ「いやあ～面白かったわ～。今何年目なん？」

小林「４年目です」

ＭＣ「４年でテレビ出るなんてすごいやんか～。狙うはやっぱりＭ－１ですか？」

小林「いや～そうですね」

隼人「当たり前やん」

一瞬凍り付くスタジオ。

ＭＣ「おお～言ってくれるやん。君のオールバックが全部語ってくれてるわ～」

笑っている客。

カメラは隼人の頭にズーム。

隼人「（睨んでいる）……」

ＭＣ「お、君さては絡みづらいな～。小林君、いつも大変でしょ～」

小林「いや～はははは」

ＭＣ「ということで『酒とサカナ』のお二人でした～」

退場していく二人。

○　同・スタジオ外の廊下
　歩いている隼人と小林。
小林「お前何してんねんほんまに」
隼人「別になんもしてないやろ」
小林「失礼やろ」
隼人「こんなん普通やろ」
　小林、回り込んで
小林「せっかく推薦してくれた間宮さんに失礼や。今からでもいいから謝りにいこ」
隼人「……」
小林「な？　頼む」

○　同・スタジオ
ＭＣ「ありがとうございました～。『おデブマシーン』のお二人でした。では少しお話を聞いてみましょう」
　笑顔で出てくる斉田と本郷。
ＭＣ「お二人はＳＮＳやユーチューブでもかなり人気ということで。俺もなんか見たことあるわ～」

斉田「ほんとですか？　めっちゃうれしいです～」

スタジオに入ってくる小林と隼人。

隼人、立ち止まり、おデブマシーンを見ている。

小林、隼人を小声で呼んでいる。

ＭＣ「あれやってよ、挨拶のやつ」

斉田「ようこそ世界のおデブたち！　どうも～おデブマシーンです～」

おおという歓声。

ＭＣ「おお～、君ノリいいね～」

斉田「いやいや『酒とサカナ』ほどじゃないっすよ～」

大爆笑の会場。

笑っているＭＣとおデブマシーン。

小林、少しムッとする。

隼人、突然セットに向かって歩き出す。

小林「隼人？」

乗り込んでいく隼人。カメラにフレームインしていく。

ＭＣと斉田と本郷、ぽかんとしている。
斉田の方に歩いていく隼人。
小林「隼人、やめろ馬鹿！」
隼人、斉田を拳で殴る。
悲鳴が上がる。
スタジオ内は騒然として、収録中止の声が響く。
隼人を止めに行くスタッフ。逃げるように立ち去る斉田と本郷。
騒然とするスタジオで一人茫然と突っ立っている小林。
小林「何やってんだよ……」
間宮、頭を抱えてスタジオを出ていく。
小林「何やってんだよ！」
小林、隼人のところへ行って体当たりする。
倒れる隼人にまたがる小林。
小林「何やってんだお前！」
隼人「なんで止めんねん！　悔しくないんか！」

小林、涙が込み上げてくる。

小林「……悔しいに決まってるやろ」

と、泣きながら隼人の胸に落ちる。

セットの真ん中で泣き続ける小林。

隼人「……解散や」

泣き続ける小林。

○　ガソリンスタンド（1ヶ月後）

窓を拭いている小林。

室内に設置されたテレビに『おデブマシーン』が出ている。

笑っている小林。

外は雪が降っている。

○　公園（夕）

コーヒーを寒そうに飲んでいる小林。

横から隼人がやってくる。

隼人「なんでおんねん」

小林「行くとこないんや」

隼人「気まずいやろ」

小林「お前でも気まずいとか思うんやな」
隼人「うっさいわ」
小林「……」
隼人「……」
小林「……寒」
隼人「新しいネタ考えたで」
小林「ふーん」
隼人「読んでや」
小林「いやや」
隼人「ほな燃やすわ」
小林「よく燃えそうやな」
噴き出して笑う二人。
小林「帰るわ」
隼人「ほなね」
小林「おう」
歩いていく小林。

了